

佐々木雅發著『芥川龍之介 文学空間』

宮坂 覺

佐々木氏にとって、初の芥川論の著である。すでに、氏は、『鷗外と漱石——終らない言葉——』（三弥井書店）、『島崎藤村——「春」前後——』（審美社）などの著がある。氏の作品論を中心にした芥川論は、一九八三（昭和五八年）の『文学』五月、八月に連載した『「地獄変」幻想』から、本格的に始まっている。文献目録を渉獵してもそれ以前には容易に見えられない。当然、この著で収録されている論考もこの論が最も古いわけだが、「あとがき」で、次のように開陳されている。

本書に収めた論文のうち、もつとも早いものは『「地獄変」幻想』である。今から丁度二十年前（昭和五十八年）モリス・ブランシヨの著作——『焔の文学』（火の部分）、『文学空間』——「来るべき書物」等をしきりに読み漁っていた頃で、着想もそこから得た。／＼その後ブランシヨに導かれて、ハイデッガーの『存在と時間』やヘーゲルの『精神現象学』を読み、さらに櫻山欽四郎氏や大森荘蔵氏の著述を読み進めた。その読書遍歴は、『藪の中』「捜査」（昭和五十八、九年）以下それぞれの論に、自ずと投影されているだろう。

芥川論（正確には芥川文学論）の始原に自らも『「地獄変」幻

想』を置き、時間的には昭和五十年代後半にしている。この著は、氏の（丁度二十年）間に芥川文学と切り結んだ成果である。

本書には、『羅生門』から、『幽車』までの、十二作品が章立てられ論じられている。絶筆「西方の人」もサブタイトルで言及されているから、実質的作家誕生から自裁までの作家芥川の生涯の文学をカバーされているといつてよい。何よりも圧倒されるのは、著者のただならぬテキストに対峙する姿勢である。概算ではあるが、原稿用紙にして本文だけで一一三〇枚ほどになる。ならば、一作品に費やした枚数は原稿用紙にして平均九三、四枚ということになる。これほど真摯にテキストを読んだ著作に出会ったことはない。まさに、それは「精緻を極めたテキスト解説が、文学空間（ブランシヨ）の根源へと誘う」という言説に恥じない。ちなみに、やや少ない「少年」論が五〇枚弱、「羅生門」論が六〇枚強、「大導師信輔の半生」論が七〇枚弱、多く費やされたのが、『藪の中』論や『幽車』論で一四〇枚を超えている。そのほか七〇枚代が三編、八〇枚代が二編、一一〇枚、一三〇枚代が各一編である。これを見ても、著者がいかに精緻な解説を目指したか知れよう（注にいたっては、『幽車』六〇項目、『奉教人の死』が五〇項目ある）。いうまでもなく、文量を費やせば解説できたなどと短絡しているのではない。この著には、緩慢で饒舌さがみられない。氏が、〈零度〉からテキストを立ち上げ、自らの教養を賭して解説しようとしている姿勢がある。同時代評から執筆直近の論まで、研究史を丹念に紐どきながら論を展開してゆく。が、常に自らの解説を先行させ、先行文献の中に相対化してゆくという研

究姿勢である。であるから、読者の研究教養を強要しつつ展開する論とは差異がある。論を開示しながらも、最初の読者として自らを意識していることが読み取れる。それは、一見饒舌さや緩慢さと見紛う要素もある。が、この著を通読するにしたがって、先ずテクストに執拗までに真摯に立ち向う論者の姿がたち現れていく。本論に拮抗するかのようには、詳細な註がそれを補強している。含んで聞かせるような論の展開に外連味など感じない。そこには、文量の嵩みは避けられなかったのである。

当然のことながら、本書は、作品発表に従って時系列的に章立てが構成されている。ここ初出順に紹介してみると、「地獄変」幻想―芸術の欺瞞―(83・二章*章の表記はないが便宜的に付す。以下同じ)、「羅生門」縁起―言葉の時―(84・一章)、「藪の中」捜査―言葉の迷宮―(1)(83―4・七章)、「奉教人の死」異聞―その女の一生―(88・三章)、「六の宮の姫君」説話―物語の反復―(90・八章)、「舞踏会」追思―開化の光と闇―(93・四章)、「秋」前後―時を生きる―(98・五章)、「一塊の土」評釈―人間の掟と神々の掟―(96・九章)、「少年」笈記―知覚と想起―(01・一〇章)、「お律と子等と」私論―「点鬼簿」へ―(02・六章)、「大導師信輔の半生」周辺―「西方の人」―「続西方の人」へ―(02・一章)、「藪の中」捜査―言葉の迷宮―(4)(02・七章)、「歯車」解説―終わらない言葉―(未発表・二二章)となる。芥川研究が晩年の作品から始発することが多いが、氏は前期の作品から始発し晩年の作品にいたつていくことも読み取れる。それは、危うい芥川神話からの緩やかな開

放をも意味する。さらにいえば、作品論でありながら、わずかに「試論」が見えるだけで、「論」はない。ここにも、本著の姿勢が見て取れよう。サブタイトルの幾つかにいたるやそれは如実に現れている。おそらく、手垢の汚れた言葉では、食み出すことを認識しての業であろう。この並べ方やタイトルの付し方に、氏の現今の文学研究への異議申し立てを感じ取るのは、深読みで牽強付会であろうか。あるいは、それを読み取るのは筆者だけではない(論のみならず、一見してわかるように、装丁など本書の本作りにも、また氏の姿勢を嗅ぎ取れよう。現今の流通し交通している研究周縁にも氏は届く。〈二十年〉の中で、論の展開に多少の変容もあるものの、テクストに立ち向う姿勢に大きな変化はない。いわば、自らの言葉で解説発話し、それを実直なまでの研究史による実証は、あるときは空白を感じることもあるが、その双方向的な牽引は本書の魅力ともなっている。

内容にはいつて、いくつか気に止まったこと記してみる。多くの論は書誌的なものから書き出している―たとえば、「〇〇〇〇年〇月、〇〇〇〇月号に発表されという常套的論の開き―が、一、二、七、一一、一二(書き下ろしならぬ「未発表」とあり、執筆時期は断定できない。が、注に「平成一年」の文献が見え、この時期以降に執筆したことが伺える)は、常套を採っていない。

一体、〈言葉〉とはなんであろうか。人間は〈言葉〉によつてなにかを語る。しかし〈言葉〉によつて、本当になにかを語ることができるのであろうか。むしろ〈言葉〉を口にした途端、本当に語るべきことはどこかへ消え去ってしまう

のではないか。しかも人間は〈言葉〉なしではなにも語りえない。いや考えることも、ばかりか、生きることさえもできないのではないか。／現在、〈言葉〉は危機を迎えている。

〈言葉〉は信じられていない。それはなにかを語るべく、完全でないばかりか、人に虚偽をさえ強いている。

とは、「藪の中」捜査―言葉の迷宮―の書き出しである。プラトン、ニーチェ、カント、フヒテ、デカルト、フッサール、ハイデッカー、櫻山欽四郎、足立和浩、サルトル、木村敏、大森荘蔵などの言説を援用しながら、藪の中を踏査捜査して行く。かと思ふと、次章の「二六の宮の姫君」説話―物語の反復―は、その材源である「今昔物語」の当該説話を脇におき校訂をするかのごとき両者に密着し詳読を試みる。各章とも、おおむね、テクストに沿って、章ごと、節ごと、あるいはトピックスごとに読み解く方法をとる（最後半の二編「大導寺信輔の半生」周辺―「西方の人」―「続西方の人」―、「菌車」解説―終わらない言葉―（未発表・一二章）はこの方法を探っていない）。章立てのあるテクストや「少年」のようにオムニバス風のそれには有効であるが、全体像の結実度において注文が付けられるかもしれない。たとえば、先に「藪の中」論の冒頭を引用したが（「1 はじめに」の冒頭部である）、ここに重い提起があり、それを前提に読者は、各〈物語〉の解説を読む。が、最終章は「4 巫女の物語」になっている。すなわち、「はじめに」に呼応するものが欲しかった。もちろん、詳読の過程で十分「はじめに」と共鳴しクリアーしながら進展するのであり、読者に総合的に再構築する責任が問われているのかもしれない。

いが、迷宮に置き去りにされた軽い錯覚も起きてしまった。それぞれの〈章〉の読みが詳読であればあるほどに、その欲求が生まれる。この方法を探ったことよって、「奉教人の死」、「藪の中」あるいは「菌車」等の解説は成果をあげていることは繰り返すまでもないであろう。

各章の内容に立ち入る余裕はなくなつた。記し始めたら、きりがな思いつくままに記してみる。「羅生門」論における、初出稿の末尾文への「結語は必然であつた。この〈下人〉の〈強盗〉に赴かんとする決然たる姿こそ、人生の〈虚無〉に〈理智の光を浴せ〉ながら、〈遮るもの〉のない空中をまつ直に太陽へ登つて行へんと決意する芥川自身の姿であつたのである」という注目や「地獄変」の良秀の縊死の解釈、〈復讐の女神〉エリニユスと芥川の深奥での問題の指摘など興味を引いた。章としては、新しいと思われる二編が評者には論として印象的であつた。特に、「大導寺信輔の半生」周辺―「西方の人」―「続西方の人」―は、新しい地平を開くものであつた。「或阿呆の一生」までは巧く繋がられても、「西方の人」をここまで遡行し、さらに説得力を有しているからである。

繰り返しになるが、本書は、著者の研究教養を賭して執筆されている。或ときは哲学的な地平と融合し、エゴイズム、自己、言葉などをキーワードにしながら、散見、交通している哲学的な文学批評とは一体なんだろうという問いに時々駆られたことは事実である。